社会科学の哲学における自然主義論争を治める
――Steel による再図式化の批判的検討を通して――

清水 雄也（本学社会学研究科博士後期課程）

本発表では、社会科学の哲学における「自然主義論争」を取り上げ、これを調停するための予備的議論を提示した。以下、発表内容の概要と当日に会場から頂いた質問についてまとめる。

社会科学の哲学における自然主義論争は基本的にメタ方法論的な論争であるが、従来その論争は「自然主義 vs. 解釈主義」という 2 つの陣営の対立として理解されてきた。標準的な理解によれば、自然主義とは「自然科学と同じ方法や規準を用いて社会を研究することは可能であり、またそうすべきである」という立場であり、解釈主義とはまさにこの自然主義に反対する立場である。反自然主義的な立場が特に解釈主義と呼ばれるのは、社会科学固有の方法として解釈や理解を重視するからである。

Daniel Steel は、近年の論文「自然主義と啓蒙主義的精神」において上述のような標準的構想を批判している。彼によれば、自然科学の規準・方法という観点（NSS）から自然主義論争を特徴づけるべきではない。自然科学の諸領域がそれぞれ微妙に異なった基準や方法によって組織化されているという実情を踏まえれば、NSS にまともな内容を与えられないのは明らかだからである。そこで彼は、「啓蒙主義的精神（EI）」という概念によって論争を再図式化することを提案する。EI とは、「社会科学は、社会現象の原因や結果を見出すことにより、重大な社会問題に対処するための合理的政策の基礎として社会に役立つべきである」という精神または理想である。この図式によれば、自然主義とは EI に賛同する立場であり、これを拒否するのが解釈主義であるということになる。

しかし、自然主義論争を過去の学説史的問題としてのみならず現代的な議論の枠組みとして捉えようとするならば、EI 図式はさらに洗練されるべきである。EI 図式は、充分な検討なしに反自然主義を解釈主義と同一視し続けている点、社会改良という価値を図式化に持ち込んでいる点において批判の余地を残している。解釈主義と伝統的に呼ばれてきた立場は、第一義的には方法としての解釈・理解の可能性を擁護するものであり、これは現象間の因果解明の可能性を直ちに排除するものではない。また、因果関係の解明可能性を支持することは、それ自体では解釈的方法の可能性を拒否することではない。したがって、因果的解明可能性の主張によって自然主義を特徴づけるならば、その否定としての反自然主義は必ずしも解釈主義とは一致しないはずである。この考察から、本発表では、自然主義論争を社会現象間の因果的解明可能性への賛否を軸とする対立として図式化するのが望ましいと論じた。そして、1 つの論点を軸とする明確な図式を与えるために、価値に関する規範的問題を図式から除去することを提案した。自然主義が歴史的に特定の価値と結びついていたとしても、単純かつ明確に論争を図式化するためには一旦それを別問題として取り分けておく方がよい。この新しい図式の長所は、争点を明確化することで、曖昧性から生じる不必要な対立を回避できる点にある。特に、自然主義と解釈主義の両立可能性を図式それ自体が排除しないということ、つまり伝統的対立の調停可能性が残されているということが重要である。

質疑の際に、会場から多くの有意義な質問や意見を頂いた。ここでは、その中でも特に重要だと感じた 2 つの質問について述べる。1 つは、「論争が歴史的に社会改良という価値と結びついてきたという Steel の洞察を切り捨ててしまってよいのか」という質問であり、これに対しては、当該論争を単なる

学説史的問題ではなく、今後決着がつけられるべき現代的問題として扱うにはそうした方がよいのである、と答えた。もう１つは、「解釈主義の特徴づけが不充分なのではないか」という質問であり、これについては、本発表の目的を達するには上述のもので充分であると答えた。いずれの問題も、今後さらに明確な解答が与えられるべき重要な課題である。